

エッセイ 詩人ダルウィーシュを生んだパレスチナ

本稿は『詩人会議』2023年2月号に掲載された同タイトルのエッセイに、許可を得て加筆・修正を加えたものである。特に、「イスラエル兵士への手紙」（ダルウィーシュとブセイソウの共作）は1982年当時『フィラスティン・びらーでい』誌に掲載された訳詩全文（原文の3分の2に短縮したものであるが）を本稿では掲載している。（『詩人会議』誌上でさらに割愛・短縮せざるを得なかったが、ここでは元どおりに復活させている（編集部）。

長沢美抄子

1, 一越境する詩と日本一

わたしを祖国の地へ

アブド・アル＝ワッハーブ・バヤーティ

ああ 主なる神よ
わたしを祖国の地に
つれもどして下さい
雲の風のにり 星の光の中で
ナイチンゲールがうたう
わたしの祖国へ

主よ わたしに返してほしいのです
春のふところに咲き誇る百合の花を
日の出をうたい 春をうたう丘を
祖国の霜を

悲しみの春が
鳥たちに向かって悲しくうたう
おお主よ
わたしは はかなき夢を
追う者ではありません
わたしをつれもどしてほしいのです
わたしの祖国
パレスチナへ

訳 関場理一（*1）

(『フィラスティン・びらーでい』1981年10月号所収)

この詩には、素朴なパレスチナ人の祖国帰還への願いがまっすぐに表現されている。その叙情性ゆえに、かつてパレスチナ人之間だけでなく世界で広く愛された。詩人バヤーティ(1926-1999)はイラク人であるが、彼もまた政治的な理由で祖国を追われ、亡命の半生を送った、イラクを代表する著名な詩人である。パレスチナへの扉を開けるには相応しい詩ではないだろうか。バヤーティは本稿の主題であるマフムード・ダルウィーシュ(1942-2008)も愛した詩人である。この詩を英訳し、哀愁に満ちたメロディをつけてギターを奏でながら歌ったパレスチナ人女性シンガーソングライターのザイナブ・シャースは、フォークロック歌手のジョーン・バエズに影響を受けていたに違いない。祖国帰還へのパレスチナの民衆の願い、祈りが世界に届くようにと歌っていた。

届いた一枚の写真の意味

深まりゆく秋のある朝、一枚の写真が電子メールで届いた。それを見た瞬間、私は震えた。若き日のマフムード・ダルウィーシュと詩人アドニス(1930-)が並んで写っていたからだ。送信してきたのはパリに住む若い友人、マリム・タマリだ。彼女は日本で育ったが、今はパリを拠点にオペラ歌手として活躍している。彼女の母は東京に住む。彼女の父は5年前の8月6日に東京の自宅で亡くなったウラジミール・タマリ(1942-2017)(*2)。哀愁を帯びた美しい絵を描く画家であった。写真にはウラジミールも写っている。1974年に二人の詩人が来日した時のものであるとすぐにわかる。アラブ世界を代表し、いまや伝説となった詩人たちの若き32歳と44歳の姿である。ダルウィーシュは1969年第一回ロータス賞を受賞し(*3)、アジア・アフリカの若い詩人の旗手となっていた。

パレスチナの詩は本質的に「抵抗詩」と言える。恋愛の詩かと聞こえるような詩も、その多くは祖国とその大地を愛する母あるいは恋人に見立ててうたう詩である。



(写真説明) 5人の真ん中がダルウィーシュで、その右がアドニス。右端はサラーフ・ディフニー。右端の二人は今も健在。ダルウィーシュの左はウラジミール・タマリ(左端は名前不詳)。撮影は1974年7月。場所は東京。

「イスラエル兵士への手紙」とダルウィーシュの詩の世界

ダルウィーシュやガッサン・カナファーニ文学を翻訳してきたアラブ文学研究者の奴田原睦明や岡真理による評論や解説を無視するわけにはいかないが、ここではパレスチナの詩に魅かれ、研究テーマの中に取り込んだ英文学者の早川敦子や小泉純一に注目し、その着目点について触れておきたい。

英文学者の早川敦子がダルウィーシュと共にパレスチナ詩人を代表するファドワ・トゥカーン (1917-2003) の詩に出会ったときの衝撃をこう書いている。「思わず目の前に閃光が走った。」そして「祖国への深い愛情を主旋律に、この詩人はイスラエルによるパレスチナへのやむことのない侵略と暴力に抵抗する強靱な精神を高らかにうたい上げていたのだ」と。(※4) そして、「イバラの森を抜け、風の唸り声を聴きながら、幾多の命が『崇高な死の抱擁に向かった』ことを告げる詩人の声が、夜の闇の彼方に未来を繋ぐ美しいまでに孤高な精神のありようを語る」と。なんと洗練された美しい響きの深い表現であろう。

同じく英文学者の小泉純一(※5)は、パレスチナ系米国人詩人のネオミ・シーハブ・ナイ (1953-) の小説に出会ったのをきっかけに、パレスチナ問題、そしてマフムード・ダルウィーシュに行き着いた。「ダルウィーシュは死者たちに自分の姿を重ね合わせることがある。・・・パレスチナの地に戻る願いが亡霊に込められている」と、生と死を同時に生きるパレスチナ人たちの魂のあり様に注目し、それが後期のダルウィーシュの詩に流れていると指摘する。

また、小泉はダルウィーシュにとって1974年に広島を訪問した深い意味をダルウィーシュの叙事詩ともいえるべき『忘却のための記憶』の中に見出す。それは1982年のイスラエルのレバノン侵攻がいかに深い傷を彼に与えた戦争であったかがうかがい知れる

1982年のイスラエルによるレバノン侵攻時、イスラエル軍の包囲下の西ベイルートはイスラエル機の爆撃に2カ月以上もさらされ続けた。死の淵に立たされていたダルウィーシュは、詩人のムイーン・ブセイソウ (1926-1984) と長編の詩を爆撃の続く西ベイルートで共作し発表した。「包囲の中から―イスラエル兵士への手紙」である。ブセイソウは当時、パレスチナ作家会議同盟議長でA・A (アジア・アフリカ) 作家会議の『ロータス』誌の副編集長であった。

ロシア・ウクライナ戦争が9カ月 (2022年12月時点) 経っても出口が見えない今こそ、読んでほしい詩だ。だがここで、戦場はウクライナだけではないことにも気づいてほしい。1981年頃に来日したこともあるブセイソウはこの詩の記者に、「作家、ジャーナリストも全力で闘争に参加している。私たちは断固として、故郷パレスチナへの道を歩み続ける」と語っていたそうである。そのわずか1年半後にブセイソウはロンドンにて58歳で客死した。生を受けた故郷ガザでの埋葬はイスラエルに拒否された。また、ウクライナ戦争に世界の衆目が集中している2022年、隠れて見えないところで、自治とは名ばかりの、事実上の占領

下パレスチナは今日も厳しい弾圧を受けている。以下は、長い原詩（アラビア語）を全体の3分の2に抄訳したものである。

イスラエル兵士への手紙

マフムード・ダルウィーシュ

ムイーン・ブセイソウ

ベイルートは ベイルートの中で

身じろぎもしない

小鳥は バリケードの上で

身じろぎもしない

窓は 瓦礫の上で

開きもしない

ベイルートは 神の侍女のように

その腕の中で

激しい嵐に 乳を与える

きみに 書こう

包囲されたるものから包囲するものへの手紙を

砲弾が わたしたちを 焼いてしまう前に

あるいは きみを 焼いてしまう前に

きみに 書こう

そして 尋ねよう

いつまで 海の中の島を 攻め続けるのか

いつまで わたしたちの胸肉から りんごを取り出し続けるのか

いつまで わたしたちの眼から ジャスミンの花を 取り出し続けるのか

いつまで 墓を広げて

墓の中に 住み続けるつもりなのか と

きみに 書こう

砲弾が わたしたちを 焼いてしまう前に

あるいは きみを 焼いてしまう前に

ベイルートから 書こう

包囲にまつわる詩（うた）を書こう

きみに 尋ねるために

誰が もう一人を 閉じ込めているのか

誰が 住いを 鉄の中に 定めているのか

それとも 詩の中に 生きていてもいいのか
きみに 書こう
砲弾が わたしたちを 焼いてしまう前に
あるいは きみを 焼いてしまう前に
おお 甲冑に身をかためた 酔っぱらいよ
おお 錆びついた甲冑をまとして わたしたちを
閉じ込め 自らも閉じ込められている者よ
きみは 安らぎの中にいるか

きみは 破壊して 破壊し
殺して 殺し
突き進んで 突き進み
切り倒して 吹き飛ばし
打ち壊して 粉々にした
きみは 安らぎの中にいるか

きみの目に わたしたちは 今 このレバノンで なんと映っているのか
砂のつまった袋と 見えるのか
それとも霞でできた羊と 思うのか

おお 時空の迷信の中に 踏み迷った者よ
おお 忘却の地図の中に 踏み迷った者よ
おお 犠牲の息子よ おお 炎と刃の息子よ
記憶から 何かを学んだか
アウシュビッツで 粉々にされた きみの亡骸の灰から 何を学んだか
粉碎機に追われる者よ
エルサレムの陥落から 学びはしなかったのか
きみの いにしへの道から
きみの いにしへの黄金の偶像から
きみの いにしへの神との契約から
学びはしなかったのか

包囲は 続く
海は わたしたちの背後に 輝き
きみは わたしたちの流した血の中に いる
包囲は 続く

わたしたちの身体（からだ）は 塹壕で
血は炎だ
わたしたちは 石を パンに焼き
月を 麵に こねあげ
旅路を 最後まで 続けよう——
美しい われらが川の 流れの中を

包囲は 続く
名前は 印章の中にあり
神は アダムの中に
やがて 世界を生む
われらが傷の中からは
カンテラが 灯をともし
包囲は 続く

おお 戦車の中に住む者よ
戦車の中で 男は 一生 排泄を続けることが できるのか
戦車の中で 男は 読み書きを続けることが できるのか
戦車の中で 男は 鳩を飛ばすことが できるのか
戦車の中で 男は 妻と交わることが できるのか
戦車の中に 樹を植えることが できるのか
おお 戦車の子宮より 出たる者よ
おお 戦車の子宮に 還りゆく者よ
いつまで その鉤爪（かぎづめ）の中に いるのか
いつまで 心安らかで いられるのか

遠い国へ出す
今日の新しい手紙に きみは 何を書いたのか
まもなく 帰る と書いたのか
戦争は まもなく 終わるよ と書いたのか
残ったのは ただ 炎に包まれた塹壕と 銃と 通りと
そして 包囲された町の人間が一握り 山と積まれた声明文の上に
・・・戦争は終わり 次の戦争を生む
そうして そうしてきみは やがて
水道の蛇口を ひねり

手を 洗う
だが いかにして？
せっけんは 子供の頭で
水は 土墨の砂と いうのに
そして いかにして これから
きみは 心安らかに 通りを 歩けるのか

おお わたしたちの祖国に住みついた 六角の（ダビデの）星よ
いつまで 時の流れと 戦い続けるつもりなのか
いつまで わが骸（むくろ）は
壁にかかった時計のように
忘れられた時刻を 鳴らし続けるのか
そして いつまで きみは
砂の上に碎ける 白波を 恐れているのか
いつまで きみは
山に炎を咲かせる 赤い薔薇を 恐れているのか
いつまで きみは
カモシカの足音を 恐れているのか
いつまで この水は
われらの間を 死の川となって 流れ続けるのか
そして いつまで このパンは
われらの間で 死の食べ物で あり続けるのか
いつまで きみは 死人のように 生きるのか
いつまで きみは 死人のように 生きるのか
あたかも わたしたちは 一つの骸の 二つの顔のよう
そして われらの間で 洪水が すべてをおおい尽くす
いつまで きみは（ユダヤの）『契約の箱』を かついで歩くのか
おお 『契約の箱』の主よ
きみは 安らぎの中にいるか
きみは 安らぎの中にいるか

訳 加納吾朗（*6）

（『フィラスティン・びらーでい』1982年10月号所収）

占領され、土地や家を奪われ、追放されてレバノンに逃れたパレスチナ人たちは、いったい、そこからどこへ行けば良いのだろうか！ 故郷への帰還が許されない人々はどこへ行けば良いのだろうか！ 占領者・追放執行者によるパレスチナ人殺しの現状を見てく

れ！ と叫んでいるのが聞こえてこないだろうか。

イスラエル人が犠牲になるテロは大きく報道される。が、毎日続いているパレスチナ人が犠牲になる「テロ」は誰も取り上げない。報道の不均衡は深刻である。

この「イスラエル兵士への手紙」はイブラヒム・スースの名著『ユダヤ人の友への手紙』（*7）を思い起こさせる。パレスチナの文化人たちは、こうして幾度も何度も、立場を異にし、相手を理解しようとする心を閉ざしてきた「敵」の人間に対して、必死に訴えかけてきた。その敵によって「非存在の存在」とされ、とことん除去したい対象にされ、民族浄化にさらされてきた人間たちは、しかし敵に対して全力を尽くして理解を求め、互いの溝を埋めようと努力してきたのである。「敵」が囚われている迷信から解放しようとしてきたのである。

アラブ文学を日本に紹介した先達 1970～80年代

これまでパレスチナの詩は日本で紹介されてきたが、数は少ない。しかし、パレスチナの詩が続々と欧米でパレスチナ人自身の努力もあって英訳されてきたおかげで、英文学者たちのみならず、世界の人々がダルウィーシュたちパレスチナ詩人の詩に接することができるようになった。ダルウィーシュの詩、詩集は22の言語に翻訳されている。日本では四方田犬彦訳の『マフムード・ダルウィーシュ 一壁に描く』があるが、1980年代以降、欧米、特に米国で盛んにアラビア語の文学が英語に翻訳されてきたのと比べるとその差は歴然。

ダルウィーシュが来日した1974年前後は違っていた。来日直前に出版された野間宏責任編集『アラブ文学選』の中にダルウィーシュの詩一篇が紹介された。その4年後に『詩人会議』に二篇の詩が土井大助の訳で紹介された。1982年3月に出版された高良留美子訳・編の『アジア・アフリカ詩集』（1982）の中に四篇が紹介された。特筆すべきは、1981～83年にアラブ連盟駐日代表部によって刊行された土井大助訳『パレスチナ抵抗詩集・全三冊』である。（*8）その中には、十五篇のダルウィーシュの詩が紹介されている。大変な労作である。画期的な時代であった。アラブ世界の文化。とりわけパレスチナに対して積極的・自覚的に心を開いていた時代である。

『アラブ文学選』には、野間宏のみならず、アラビア語の文学に造詣の深かった池田修や関根謙司、文芸評論家の竹内泰宏によるすぐれた解説もある。ガッサン・カナファエニのパレスチナ文学論も掲載されている。はじまったばかりの日本でのアラブ文学研究の未来は明るいかのように見えた。ダルウィーシュらを日本に招いた「日本アラブ文化連帯会議」の母体は、1958年にタシケントで第一回大会が開かれたアジア・アフリカ（A・A）作家会議が契機となって生まれたA・A作家会議日本評議会（事務局長：堀田善衛）である。8人ものアラブの文化人を独自に日本に招聘し、東京、大阪、福岡でシンポジウム開催を実現させた野間宏たち先達の情熱と執念に驚かされる。70年代という時代の輝きと勢いがまばゆい。

『詩人会議』が2009年2月号で、前年の8月に亡くなったダルウィーシュ追悼文（ラムッラーで発行されるパレスチナの月刊誌に掲載されたパレスチナ人二人による追悼文の翻

訳) を載せているのは貴重である。追悼文の中に、ダルウィーシュの詩の朗読会が行われるスタジアムには、「いつも数千の聴衆が集まった」とあるのが目にとまった。口承文学という伝統の中で育まれた彼の詩の力強さと美しさに民衆は酔う。そこでは祖国を奪われ占領下で喘ぐ苦しみの共有と人間の尊厳の回復への願いが満ちあふれたであろう。90年代からの詩は離散パレスチナ人たちの魂の声となり、ネオミ・シーハブ・ナイの言葉を借りると「より抒情的で、想像性豊かで、余韻のある、哀調を帯びてはいるが情熱的でしかも優雅」なものになった。(＊9)

ダルウィーシュは長年患ってきた心臓の手術を 2008 年夏、「ヒロシマの日」に米国で受け、そして三日後の「ナガサキの日」に亡くなった。彼の故郷であるガリラヤに葬りたいとの遺族からの願いもイスラエルには聞き入れられず、西岸のラマッラーに葬られることになった。“国葬”として。

パレスチナを代表するもう一人の詩人ファドワ・トゥカーンについては、武田朝子の訳による『「私の旅」パレスチナの歴史』(1996年)という自伝が出ているが、ファドワ・トゥカーンの詩が好きだというエルサレムの友人は、彼女の詩は幼い頃からいつも共にあってその詩と一緒に育ったようなものだという。それだけパレスチナ人にとっては身近な詩人なのであろう。この『詩人会議』(2009年2月号)の海外詩特集の誌上で、トゥカーンの詩の魅力と意味、そして彼女の生き方があますところなく伝えられている。(＊10) トゥカーンの後半生の自伝の翻訳が待たれる。

新星タミーム・バルグーティの詩

最後に、いまアラブ世界で最も広く読まれている詩人の一人で、エジプト生まれのタミーム・バルグーティ(＊11)の詩を紹介したい。世代を超えた人気とカリスマ性のある新世代詩人の一人でアイドルスターと言っても良い存在である。ダルウィーシュと同様に、詩の朗読りサイトでは数千人が集まりスタジアムは超満員だという。

初めて英訳された彼の詩集が『エルサレムにて、他』(2017年)。その中で最も有名な詩が「エルサレムにて」である。その長編詩の中の一節を紹介しよう。(＊12)

「エルサレムにて」より

タミーム・バルグーティ

エルサレムの美しきもの
それは八角形で青い色
その上には聖なる黄金のドーム！
その高貴な姿はふっくらとした凸面体の鏡のよう
空を映し 空と戯れ 空を引きよせ

包囲のなかで 必要とする人たちへの
救援物資の袋のように
空が分かち与えられる
金曜日の説教のあとで
信徒たちが礼拝のために天に向かってかざす
その手に渡るかのように

エルサレムの空は すべての人に分け与えられている
我々はエルサレムの空を守り 空は我々を守る
我々はその大切なものを背負っていく
時が空にのぼる月をいくたびも理不尽な目にあわせたとして
(英訳 ラドワー・アシュール/アフダフ・スウェイフ)

訳 長沢美抄子

長編詩「エルサレムにて」はタミームが最後にパレスチナ人にとって大切な「祖国の首都」エルサレムを訪れた時の文学的なルポルタージュだとされる。紹介した一節には、エルサレムがパレスチナ人にとっていかに誇りであり、崇敬の場であり、かけがえのない地であるかが「エルサレムの空」というシンボライズされた言葉で映し出されている。この長編詩全体のトーンはもの悲しい。しかし、エンディングは悲観的ではない。前半はエルサレムの風景と人々のあり様をみつめ、現実がありのままに淡々と、しかし辛辣にスケッチされる。クスッと笑えたりもする。後半にはエルサレムという都市が包含する壮大なスケールの歴史が描かれる。そして最後に、「泣くな、アラブの同胞よ」と声をかける。泣くなっておかしい。きみは、さまざまなルーツとアイデンティティをもつ人々と一緒に住んでいる。それでいいではないか！エルサレムの空はきみのものだ、きみをずっと見守るのだから安心しろ、と自分にも同胞にも言い聞かせているようだ。

パレスチナ人作家の父をもつタミームの母はエジプト人作家である。エジプト人文学者の父をもち日本で活躍する作家、師岡カリーマ・エルサムニーのイメージにどこか重なる気がするのは私だけだろうか。ともあれ、いまや彼のような、パレスチナにルーツとアイデンティティをもつ詩人たちの詩やその他の文芸創作活動が越境しつつある。2014年に日本の有志によるクラウドファンディングで招かれ、全国ツアーコンサートを行ったパレスチナ史上初のヒップホップ・ラップグループ DAM のビートの効いた音楽と赤裸々でストレートで強烈な抵抗歌に、日本の聴衆も喝采を送った。共感し勇気づけられ、その魂の叫びに引き込まれた。パレスチナの詩や歌は国境を越えていく。この流れが勢いをつければ、残酷にしか見えなかった壁を打ち壊す日がやがて来るだろう。壁は壊されるためにあるのかもしれない。ベルリンの壁のように。そして、ウイグルの人々を押し込める塙も、西サハラの人々を分断する全長 2,700 キロの砂の壁(もしくは恥の壁)も、と私は信じている。



(※1) 関場理一はシェイクスピア研究者。

(※2) ウラジミール・タマリについては、短い評伝がある。長沢美沙子「故郷喪失の半世紀と日本—ウラディミール・タマリ氏へのオマージュ」『現代思想』2018年5月臨時増刊号、pp.190-207。彼は、画家であると同時に、物理学研究者でもあった。

(※3) 1969年にアジア・アフリカ作家会議が創設した国際的な文学賞であるロータス賞の第一回目の受賞者3人の一人。日本人ではこれまで野間宏(1972年)、堀田善衛(1978年)、小田実(1981年)、立松和平(1985年)が受賞している。残念ながら、ロータス賞は1988年以降、活動を中止した。一方、アドニスの本名はアリー・アフマド・サイード・イスビル。シリア生まれの現代アラブ世界を代表する詩人。レバノンに移住後、レバノンやフランスで精力的に詩を書き続けてきた。近刊書に『暴力とイスラーム：政治・女性・詩人』(監訳・片岡幸彦)エディション・エフ、2017年。片岡幸彦「現代アラブを代表する詩人 アドニスの詩の世界」(『詩人会議』2012年6月号)。また、写真の右端はシリア人の映画監督サラーフ・ディフニーで現在も活躍中。栗原幸夫による『新日本文学』1974年9月号への寄稿文の中で、日本アラブ文化連帯会議が開催した東京会議に招聘されたアラブの文化人の名が記録されている。他の招聘者は、ユーセフ・シバーイー、アブドゥッラフマーン・シャルカーウィ、アブドゥルアジーズ・サーデク、エドワルド・ハッラート(以上、エジプト)、ムールード・マムリ(アルジェリア)である。

(※4) 早川敦子『世界文学を継ぐ者たち—翻訳家の窓辺から』(2012年、集英社新書)。ここで引用する第四章「漂白の果て—記憶の回復」の副題は「マフムード・ダルウィーシュ『忘却への記憶—一九八二年 ベイルート 八月』」。他に早川には52ページにわたる長い論文もある。「忘却への抵抗—Mahmoud Darwish とパレスチナの表象」『津田塾大学紀要』41号、2009年。

(※5) 小泉のエッセイ「ダルウィーシュが見つめた広島〈1〉〈2〉」『中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター』(2017年7月19日、7月20日)があり、「中東と極東の作家たちの出会い：マフムード・ダルウィーシュが忘れられなかった広島」『日本福祉大学紀要—現代と文化』第135号、(2017年3月)、「十字路を描くマフムード・ダルウィーシュの亡霊」『亡霊のアメリカ文学—豊穡なる空間』(国文社、2012年)の論文がある。著書に『アメリカに響くパレスチナの声—サイード・ダルウィーシュから、ネオミ・シーハブ・ナイへ』水声社、2011年。

(※6) 訳者・加納吾朗は小杉泰(イスラーム研究者)のペンネーム。

(※7) イブラーヒーム・スース著、西永良成訳『ユダヤ人の友への手紙』岩波書店、1989年。イブラーヒーム・スース(1945-)は、エルサレムに生まれ、ウラジミール・タマリの幼友だちでもある。ピアニスト、詩人、政治学者、外交官。PLOユネスコ代表を経て、暗殺された前代表の後継としてPLOパリ事務所代表(1978-1992)を務め、1998年に国連のILO

事務次官となる。その後も国際機関で要職を務める。同時に、欧州各国の大学で教鞭をとる。現在は UAE のザイエッド大学に在職中。

(※ 8) 冊子『パレスチナ抵抗詩集 (1)』『同 (2)』『同 (3)』のうち、『同 (3)』は刊行元としてアラブ連盟駐日代表部の他に、「長野アラブ友好協会」の名もある。同協会は信州イスラーム世界勉強会 (代表・板垣雄三) として現在も活発な活動を展開している。Web サイトとブログは以下の通り。

<https://www.shinshu-islam.com> <https://muslimworld.naganoblog.jp> また、所収された詩がすべて土井大助の訳であり、その訳詩文のなめらかさと質の高さには定評がある。その他に、PLO 駐日代表部が月刊誌として刊行した『フィラスティン・びらーでい』(1979 年 10 月号-1983 年 8 月号) でも、ほぼ毎月パレスチナの詩が一篇ずつ紹介されてきた。その中にもダルウィーシュの詩が四篇紹介されている。

(※ 9) Poetry Foundation のホームページの Mahmoud Darwish についての序文参考。なお、ネオミ・シーハブ・ナイはナオミ・シハブ・ナイと表記される場合もある。

(※ 10) 『詩人会議』2009 年 2 月号に掲載された武田朝子による「女性詩人ファドワ・トゥカーンにみるパレスチナの詩と詩人」。

(※ 11) タミーム・バルグーティは 1977 年カイロ生まれ。詩集 6 冊、アラブの政治や歴史に関する学術書を 2 冊出版している。2004 年にボストン大学で政治学の博士号。ジョージタウン大学、ベルリン自由大学、カイロ・アメリカン大学などで教鞭をとる。2011 年のエジプト革命では、「ハネット」という詩を書き、タハリール広場の若者たちを力づけた。彼の詩はインターネットで数百万回再生されている。2022 年 11 月 20 日、カタールのワールドカップ閉会式に登場して一人で詩を 1 分間朗読し、会場を沸かせたのは記憶に新しい。これは YouTube で視聴可能。著名なパレスチナ詩人のムーリド・バルグーティ(『ラマッラを見た』などの著者)を父に持ち、エジプト人で英文学者・小説家のラドワー・アシュール(『タントーラの女』などの小説家)を母に持つ。いずれも逝去。

(※ 12) この詩集 (*In Jerusalem and Other Poems*) は 1996 年から 2016 年までの詩を収めたもので、この「エルサレムにて」は 2007 年に書かれた。なお、本稿での詩の英訳はラドワー・アシュールとアフダフ・スウェイフ (エジプト人作家・評論家) であるが、他にチュニジア出身で在カナダのホサーム・ベン・ラズレグによるものがある。

2, ラマッラーたより

本稿は長沢美抄子さんが「詩人会議編集部」へ送った現地からの便りであり、詩人ダルウィーシュを生んだパレスチナの地の荒れた現状を悲しむ思いを吐露した「詩」でもある。(編集部)

2022 年 12 月 21 日、こちらラマッラーの二日目が終わろうとしています。昨日、終身刑

で入獄していた有力パレスチナ人政治指導者の一人が癌で獄中死しました。その殉死者に敬意を込めて翌日、つまり今日、パレスチナ全土（西岸とガザ）が服喪の日となり、イスラエルへの抗議と追悼の日となりました。朝早めにダルウィーシュ・ミュージアムに夫と共に行ってみたのですが、到着したら閉館になっているではないですか。しばらく理由がわからず、途方に暮れていたら、近くにいた人が「ゼネスト」だよと教えてくれました。ということは、店は全部閉まるし、公共機関はすべて閉館となるし、銀行も休みとなるし、一日どうやって過ごしたらいいの！ と真っ暗な気持ちになってしまいました。でも、ひらめきました。前日にラマッラーのザウィーエ・ギャラリーでお会いしたナビル・アナーニさんが食事に誘ってくれていたのを思い出したのです。それで、パレスチナを代表する、わたしの憧れのその画家は私たちを自宅に招いてくださり、工房を見せてくださり、美味しい昼食にあずかりました。夕方からはベツレヘムのウォールドオブホテル（通称バンクシーホテル）で画家たちの会合があるから一緒に行かないかと誘っていただきました。スレイマン・マンズールさん（パレスチナを代表するもう一人の画家）もエルサレムから来るよと聞かされ、なお一層心は踊るのですが、迷惑をかけてしまうかもと悩んだ末に遠慮してしまいました。でもいま、嗚呼、二度とない千載一遇のチャンスを逃してしまったと、ものすごく悔やんでおります。

投獄されているパレスチナ人政治囚は、恐ろしいことに現在およそ5千人いるらしいのですが、皆イスラエル領土とされる場所に作られたいくつもの監獄に閉じ込められています。凄まじい拷問のことも聞いています。昨日亡くなった殉死者も20年以上服役していたそうです。遺体は遺族に引き渡されることはけっしてないのだそうです。監獄で死を迎えた者は二度と家族の元に戻れないのです。例外なく。人間のすることとは思えません。そのうえ、イスラエル兵士たち、入植者たちが狂ったように、無差別に、ちょっと気になった路上の青年や子どもたちを狙い撃ちして殺しています。毎日一人、二人と、罪のないパレスチナ人の若者たちが躊躇なく殺されています。アナーニ画伯も一度狙い撃ちの対象にされる危機があったと生々しく語ってくれました。だから、日に日に危険度が高まっていた西岸の北部の都市、とくにジェニンやナブルス等に行くことは勧めないと言うのです。エルサレムとラマッラーの間を運行するバスの中でわたしが観察していたパレスチナ人たち乗客に精神不安定なトラウマを抱えているように見える子どもや大人がかなりいるなという印象を持ちました。おかしくなって当然の環境に置かれていますからね。狂わない方がおかしいというものです。

もうすぐ日本に戻ります。お体を大切にお過ごしください。それではまた。

*後日、エルサレムから国際空港までタクシーで約1時間イスラエル内の道路を進んでいくとき、右手、分離壁（アパルトヘイト壁）の向こうに西岸の町々が見えました。ラマッラーもすぐそこに見えます。こんなに近いのだと改めて驚きます。こちら側は何の障害もなくスムーズに車は流れているのに、あちら側、つまりエルサレム（東エルサレ

ムでさえパレスチナ領土とは見なされていないどころか、完全にイスラエルに制圧されているようなもの) からラマッラーまでのほんの短い距離でさえ、バスだと何時間もかかるのです。検問所通過に時間がかかるのが大きな原因。タクシーで行っても、ラマッラーまでの道路沿いには、たくさんの監視装置があり、ややこしい道を行かねばなりません。運転手も緊張して運転するわけです。窮屈で息苦しくてなりません。西岸地区もガザとは違う包囲のされ方をしているということです。ここも大きな監獄です。常に監視の目にさらされ、イスラエル入植者たちや兵士の攻撃にいつなんどき遭うかもしれないという恐怖の中で生きなくてはならない。そういう現実が事実上占領下の西岸にはあります。